

砺波散村の発生要因と持続要因の考察

【序論】

第0章 本研究について

- 0-0 はじめに
- 0-1 研究の動機・背景
- 0-2 研究の目的
- 0-3 研究の方法
- 0-4 本研究の基礎情報
- 0-5 既往研究と本研究の位置付け

【本論】

第1章 砺波平野における環境

- 1-0 はじめに
- 1-1 砺波平野の大地と農耕
- 1-2 庄川氾濫の特異性
 - 1-2-1 庄川の東遷
 - 1-2-2 庄川の洪水史
 - 1-2-3 松川除堤防
- 1-3 開墾可能地の変遷
 - 1-3-1 近世以降の村落成立の過程
 - 1-3-2 中世における村落の開発状況
- 1-4 環境的視点から見る砺波平野の「ムラ＝斑」
 - 1-4-1 砺波平野の村落類型
- 1-5 小結

第2章 砺波平野における社会・政治

- 2-0 はじめに
- 2-1 加賀藩の農地政策
 - 2-1-1 局地的農政
 - 2-1-2 全国的農政
- 2-2 下部組織における形態的矛盾とその対策
- 2-3 加賀藩砺波郡の草高の変遷
- 2-4 社会・政治的視点から見る砺波平野の「ムラ＝村」
 - 2-4-1 近世の「村」の成立
 - 2-4-2 太田村における経営規模の変遷と新村開発の過程
 - 2-4-3 砺波散村における「村」経営規模の変遷
- 2-5 小結

第3章 砺波平野における自然慣習

- 3-0 はじめに
- 3-1 散居村における人為的構築物
 - 3-1-1 二次的自然
 - 3-1-2 ムラの運営手法
 - 3-1-3 人工物
- 3-2 替田・慣行小作権の主張
- 3-3 小結

第4章 散居村共同体の構造原理の分析

- 5-0 はじめに
- 5-1 散居村共同体の構築原理の分析
 - 5-1-1 伝統的な散居景観の構造
 - 5-1-2 既往研究による分析範囲
 - 5-1-3 神社プロットによる分析範囲
- 5-2 小結

第5章 考察

- 5-0 はじめに
- 5-1 氾濫が農民の意識に与えた影響
- 5-2 砺波平野における「集村化」
- 5-3 砺波散村の発生要因と持続要因の考察

【結論】

第6章 結論

序論

第0章 本研究について

研究動機・背景

人間は生活行為を快適に進行するためにデザインを行うことから、デザインの仕方として現れる“かたち”は大地の特性によって難易度も手口も異なるのではないかという疑問を本研究の動機とする。

本研究では散村を事例に、人々の「空間への執着」が集落の造形を決定づけ、安定させる一因ではないかということを検討する。

研究の目的

本研究は砺波平野を形成した庄川の氾濫が、「環境」「社会・政治」「自然慣習」に与えた影響を分析し、散居形態である必然性を考察することを目的とする。また、災害による制限によって生まれるデザインがどのように共同体持続性に影響を与えたのかを明らかにする一助とする。

研究の方法

本研究では、砺波散村のような特殊な形態をとる共同体の発生・持続要因を「環境」「社会・政治」「自然慣習」の観点から多角的に分析する。

- (Ⅰ) 砺波平野の環境についての整理 (第1章)
- (Ⅱ) 近世砺波郡における社会・政治についての整理 (第2章)
- (Ⅲ) 砺波平野における自然慣習についての整理 (第3章)
- (Ⅳ) 村落構造の分析 (第4章)
- (Ⅴ) 散居形態の成立に関する考察 (第5章)

既往研究と本研究の位置付け

本研究では以下の研究を既往研究として位置付ける。

- 小川琢治「越中国西部の荘宅に就いて」(地学雑誌 312, 1914)
- 牧野信之助「旧加賀藩の散居村落について」(地学雑誌 320, 1915)
- 村松繁樹「砺波平野における散居村落に就いて」(歴史と地理 28-4, 1931)
- 佐伯安一、新藤正夫「砺波郡における近世新村の成立」(越中史壇 26, 1963)
- 黒野弘靖、菊地成朋「村落形態の分類とその領域構成 - 砺波散居村における居住特性の分析 その1 -」(日本建築学会計画系論文集 第477号, 1995.11)
- 金田章裕『条理と村落の歴史地理学研究』(大明堂, 1985)
- 佐伯安一『近世砺波平野の開発と散村の展開』(桂書房, 2007/10/1)
- 新藤正夫、金田章裕『富山 砺波散村の変貌と地理学者』(ナカニシヤ出版, 2011/5/1)

幾たびもの議論の末、最新の先行研究では散居村の発生を環境的要因によるものとし、契機を欠いた故に持続したと結論づけられている。しかし、先行研究では散居形態の全体的な分析に終始したのに対して、本研究では集落・農民個人にまでスケールを横断した分析を通じて、散居形態の成立に対してより精密な研究を推し進めようとするものである。

本論 既往研究整理

第1章 砺波平野における環境

砺波平野の大地と農耕

庄川の堆積作用によって形作られた砺波平野だが、その地理的特質から、人間の開拓可能地は微高地上に限定されたことを「土壌」「水利」「立地」の観点から以下のように通史的に整理した。

- 土壌環境
 - 〈古代～中世末〉
 - ・一般面と比較して、微高地には耕作に耐える厚さの表土が堆積。
 - 〈近世以降〉
 - ・幾たびの氾濫により、一般面にも多少の表土が堆積。
- 水利環境
 - 〈古代～近世前期〉
 - ・支流が網目状に分流しており、広範囲で地上から引水が可能。
 - 〈近世以降〉
 - ・主流路が固定され、旧流路が用水路として転用。
- 立地環境
 - 〈古代～近世前期〉
 - ・一般面と比較して、地表面が高いため水害のリスクを軽減可能。
 - 〈近世以降〉
 - ・主流路が固定され、水害が減少し微高地以外も開墾可能になる。

庄川の東遷と開墾可能地の変遷

庄川の「東遷」という特殊な氾濫の過程と、1714年に完成し庄川の流路を固定した「松川除堤防」によって、扇状地における開拓行為は複雑化した。

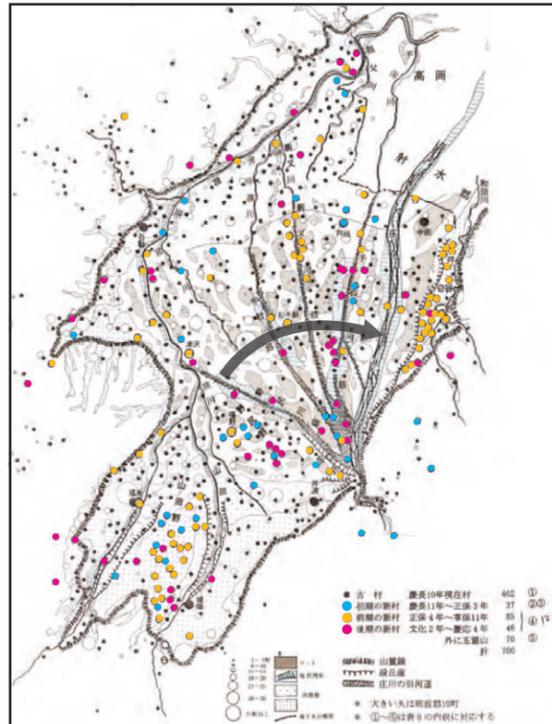


図1：微高地分布と新村開発の照合図

砺波平野の環境的特質が、開発を制限した結果、散居形態が発生したと言える。しかし既往研究では、環境的要因から孤立荘宅の必然性を立証できない。

第2章 砺波平野における社会・政治

加賀藩の農地政策と形態的矛盾

氾濫原においても生産量を維持向上するため、加賀藩は独自の農政である「改作法」と、全国的な農政である「田地割り」を慣行した。この改作法は、砺波郡における耕作地の生産力の向上に作用した。

しかし、全国的に少数派の散村における田地割り制度は、農作業をするにあたり非合理的で、砺波散村の形態に矛盾する結果をもたらす恐れがあった。そのため、農民は独自に「替田」「慣行小作権」を主張することで実質的な田地割りの無効化を図り、加賀藩もそれを認めていた。

以上から、上部組織の目指した「氾濫原における生産量の確保」と、下部組織の求める「散居村を用いた生産活動」の思考にギャップがあったことがわかる。

新村開発の過程と経営規模の変遷

集村形態をとる太田村では百姓一人50石を基本的な規模として、超過分は弟に相続をし新村開発を推し進めていった。当時の砺波郡の草高と総役家数から推測するに、この規模は砺波平野で一般的である他の散居村でも同等であったと分析できる。

また太田村は庄川東遷の被害を受け多くの耕地を失い、旧千保川跡に新村開発を行った。しかしこの平野の空隙を充填する段階において集村ではなく、散村を相続した兄弟によって構築させていたことから、松川堤防築堤後の砺波平野の充填方法は、意識的に散居形態を模倣されていたことがわかる。

第3章 砺波平野における自然慣習

散居村における人為的構築物

農民は砺波平野上で営みを育むのに伴って慣習的に「二次的自然」「ムラの運営手法」「人工物」を構築した。これらは下部組織が、環境による制限や社会・政治による抑圧に対して、積極的に手の届く空間をデザインする行為である。

替田・慣行小作権の主張

慣行小作権の主張には、第2章で言及した「農業経営上合理性」とは別に、自分の耕した土地への「執着」という側面がある。また替田行為に関しても、田地割りによる恩恵に対して「多少高が低くても、先祖代々かけて耕作し米が収穫できるようになった土地を大切にしたい」という意向があった。

本論 分析

第4章 散居村共同体構築原理の分析

第4章では、第1～3章の内容を踏まえ、具体的な集落の例に挙げて、その村落構造にもたらした微高地の環境的要因について検討を行った。以下に例とその分析および考察をまとめる。

また、本章では「形態」を村落（大字単位）の集合、「村落」を家の集合の意味とすることで、純粋に状態としての共同体の構造原理を検討した。

既往研究に対する仮説

砺波平野に村落の散在は、氾濫原に定住する上で水田耕作の可能な土壌と浸水のリスクを回避できる点から、微高地の分布に沿ったことが要因である。一方で、微高地は島のような形状で一定の大きさがあり、その中でもさらに農家が散村し続けた要因に関しては分析されていない。本研究は、村落の分布と孤立荘宅の分布の原理を同じと仮定し、微高地の中でのさらなる環境的性格の差を明確にするべく検証を行う。

検証手法

- (i) 散居村共同体の核を選定する。
- (ii) 対象をプロットし、平野全体の大字領域と重ねて文献情報を検証する
- (ii)' 対象をプロットし、平野全体の微高地分布と重ねて手法の妥当性を検証する
- (iii) 対象をプロットし、特定の大字内の微高地分布と重ねて立地傾向を検証する

検証結果

- (i) 「神社」を核としたことで、以下の二項目の検討が可能となった。
 - ・「村の精神的結合として氏神」を大地の特徴から客観的な分析
 - ・神社の立地の傾向による、微高地上の性格の有無と集落構造への影響の分析
- (ii) 神社と砺波市大字フレームの照合から、以下の二点が明らかになった。(図2)
 - ・文献通り、一大字に一つ以上の神社の存在を確認できた
 - ・多くの神社が領域の際ではなく内側に立地することがわかった

以上から砺波平野上の神社の役割は、村落領域の主張ではなく、共同体内の公共性の象徴であったことが考えられる。

- (ii)' 神社プロットと微高地分布の照合から、以下の二点が明らかになった。(図4)
 - ・微高地上には全体の約77%の神社が比定できた
 - ・第2章で整理した近世以降の新村は26%のため、砺波市の微高地以外に立地する神社の割合約23%に近い

以上から、神社プロットは村落の概要を考察する手段として妥当であると考えられる。

- (iv) 神社プロットと旧鷹栖村における微高地分布の照合により、以下の二点が明らかになった。(図4、表2)
 - ・鷹栖で最も氏子数の多い①神明社は大字の中心に位置する
 - ・①が立地する、癒師の微高地は表土が二番目に厚く、面積は二番目に大きい
 - ・①は微高地帯の中で川上に対して先端に立地している

以上から微高地帯の中にも僅かながら高度の差が存在し、旧鷹栖村の神社はそのさらに安全な立地に建てられたことが考えられる。

散居村共同体の構築原理の分析

鷹栖村の例から、散居村共同体はまず神社を勧請し、その点から領域が同心円上に広がるように形成されたと考えられる。以上から、神社は氾濫原に展開する共同体の精神的支柱であり、それは物理的な立地からも考えられる。

また、神社の立地が微高地帯の中の性格差を選択している様子から、農家も同様に細かい性格差に基づいた構造になっていると考えられる。以上から、村落が散在する原理と農家が散居するは同一であり、洪水に対する危機管理であったと考えられる。

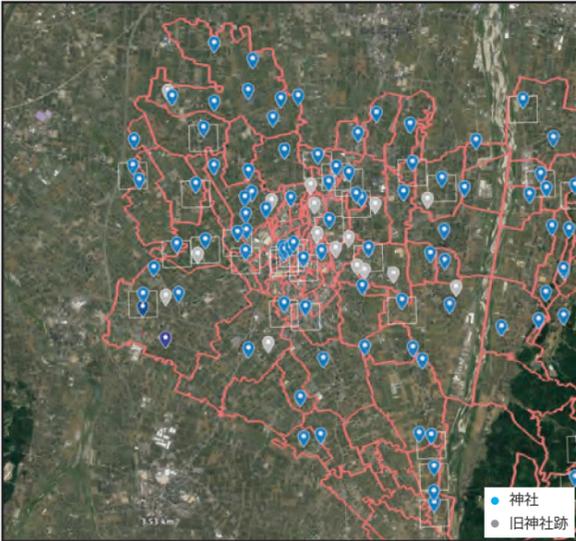


図2：砺波市神社プロットと大字フレームの照合図

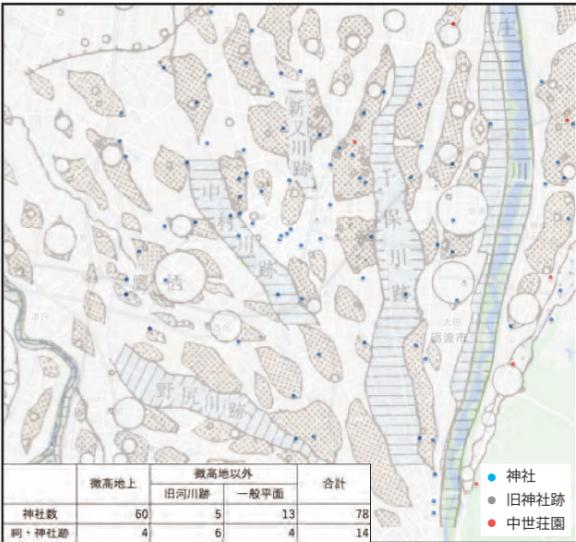


図3：砺波市神社プロットと微高地分布の照合図・神社の立地別集計表

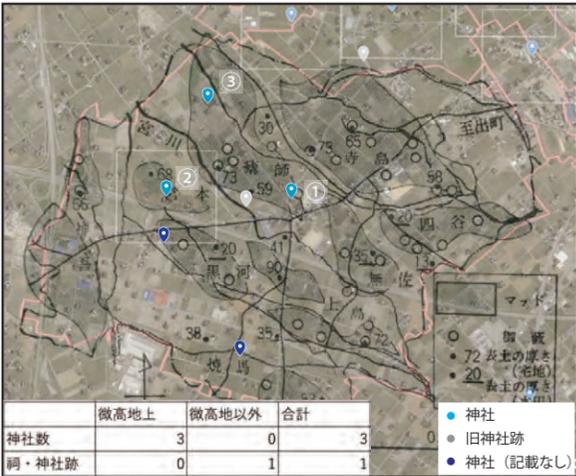


図4：砺波市神社プロットと旧鷹栖村詳細微高地の照合図・神社の立地別集計表

第5章 考察

氾濫が農民の意識に与えた影響の考察

〈古代〉

技術力が未発達である古代の開拓民にとって唯一の自由は、定住地の選択のみであったと考えられる。降りかかる全ての環境的事象に対して受動的になるほかに、農民の意識には主に生物的生存欲求が強く働いていたと考えられる。(例：微高地帯の選択)

〈中世末以降まで〉

古代の延長で、消去法的に微高地上に開墾を進めて行ったと考えられる。旧路路と扇状地西側を除き全体的に開発されていたことから、中世における農民は居住範囲拡大に対して強い開拓意志を持っていたと考えられる。(例：屋敷林、石垣の利用)

〈近世～近世前期まで〉

上部組織がデザインした氾濫原において生産力を上げる社会システムに、農民は社会的生存欲求から下部組織として従属したと考えられる。社会的支配の強まりによる皆済義務の厳格化が、より氾濫原における農民の生産活動の効率化や危機管理を促したと考えられる。(例：品種改良、集落自治)

〈近世前期以降〉

農民が田地割による「現共同体の集村化を促す外力」、松川除堤防築堤による「新村開発時の集村化を促す外力」に直面した際に、生産性とは別の観点で「空間への執着」とも言うべき内的思考の存在を自覚したと考えられる。(例：替田、慣行小作権)

この内的思考は突如発生したのではなく、古代より環境的制限を受けながら生産を伴った定住を維持していく中で自然発生的に芽生えたものであると考えられる。共同体の核として据えられた神社は、産土神や河川の守護神としてなど「空間への執着」が立ち現れた造形であると考えられる。近世後期以降、農民のこの執着は上部組織の支配から解放されると共に、愛着へと変化し空間の充実を追求していったと考えられる。(例：アズマダチ、庭)

砺波平野における「集村化する契機」の考察

金田章弘氏による「砺波散村の持続は集村化を欠いた故の現象」の主張に対して、第1～3章を踏まえて通史的に考察を行い表にまとめた。

金田が提言した、集村化する契機となり得るいくつかの随伴現象

- A…畿内の荘園に比べ、在地の開発領主の力が相対的に大きく、支配あるいは管理の構造・論理よりも、開発の論理あるいは動向が流れを決定する大きな要因であった。
- B・C…用水管理・農業経営上の進展ないし、その前提となった開発・土地利用の外延的・空間的展開の完了、と言った状況は、十三・十四世紀頃に至っても砺波平野では出現していなかった。
- D…南北朝以来の戦乱も、畿内に比較すれば影響は相対的に小さかった。

中世末まで	集村化する契機	環境	→	自然慣習	→	社会・政治
近世以降	松川除堤防 (1670)	社会・政治	→	環境	→	自然慣習
	田地割り (1642)	社会・政治	→	自然慣習		

表1：砺波平野における各種現象と要因の構造まとめ

表から中世においてはいずれの契機の欠如も、砺波平野の環境的要因によってもたらされた結果であることがわかる。また、中世は環境的要因が農民の自然慣習に働きかけ、その結果社会・政治に影響を与えるという構造が見られる。

しかし、近世において明らかに集村化を促す外力が働いたと考えられる。また中世と比較して、近世以降は自然慣習に影響を及ぼす過程に変化が見られる。「松川除堤防」は技術力向上により、人間が環境を支配する構図が生まれた事例であり、「田地割り制度」は、組織的な社会構築が、下部組織の一元的な支配を可能にした事例であると考えられる。

砺波散村の発生要因と持続要因の考察

従来の研究は、砺波散村の成立を発生・持続の要因に分け

A) 自然慣習的要因、B) 社会・政治的要因、C) 環境的要因の三点からそれぞれ考察されてきた。(図5)

しかし、従来の発生要因と持続要因で砺波散村の成立を分析するのは、解像度が不十分であるとする。

第1～3章の既往研究の成果を援用しつつ第4章の分析を踏まえて、散居村の発生要因を①起源要因、②無自覚的拡大要因、④自覚的拡大要因に細分化して考察する。また、同様に持続要因を③無自覚的持続要因、⑤自覚的持続要因に細分化して整理した図が以下である。

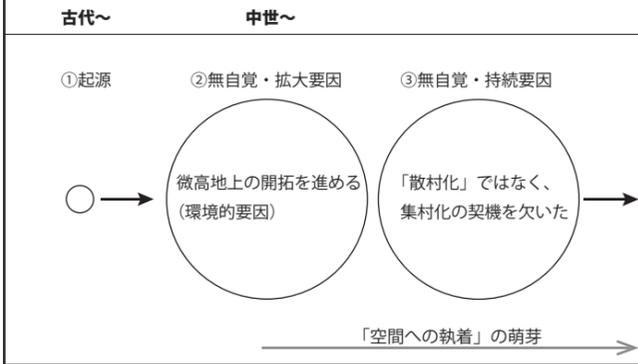


図5：金田氏による砺波散村の発生・持続要因の主張

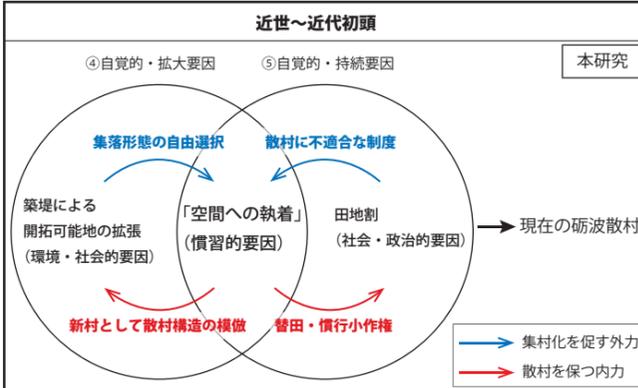


図6：本研究による砺波散村の発生・持続要因の考察

図6より、開拓民・農民の「空間への執着」が散居村の形成の核になっていると考えられる。しかしこの執着は、農民が散居村に対する客観的視座を得たことによって発現すると考えられる。つまり、中世末までは氾濫原における農耕を経た内的思考の蓄積はあっても、集村化を促す契機を欠いていたため具体的な発現は起きなかったと考えられる。

近世に入り、「自分の家の周囲に耕地を伴った生業」という主観的な構造から、「一定の距離感を保って集合した共同体」という客観的な空間構造を把握し、再現性を獲得したことによって消去法的ではなくデザインとして散居形態が発生・持続するようになったと考えられる。

参考文献・図版出典

- 砺波市史編集委員会『砺波市史』(砺波市、1990/3)
- 砺波市史編集委員会『砺波市史 資料編4 民族・社寺』(砺波市、1994)
- 砺波市立砺波散村地域研究所『砺波平野の散村「改訂版」』(砺波市、2010)
- 二万石用水史編集委員会『二万石用水史』(二万石用水土地改良区、1984)
- 糸長浩司 [2019] 『水系散居村の哲学と景観』『BIOCITY 2019年80号』
- 西田 正規『人類史の中の定住革命』(新曜社、1986)
- 中川武『建築設計技術の変遷』(『講座日本技術の社会史 7 建築』日本評論社、1983)
- 図1…砺波市立砺波散村地域研究所『砺波平野の散村「改訂版」』(砺波市、2010,p.16) と佐伯安一『近世砺波平野の開拓と散村の展開』(桂書房、2007,p.11) より筆者加筆
- 図2…GoogleEarth に筆者加筆
- 図3…砺波市立砺波散村地域研究所『砺波平野の散村「改訂版」』(砺波市、2010,p.16) より筆者加筆
- 図4…金田章裕『条理と村落の歴史地理学研究』(大明堂、1985,p.473) より筆者加筆
- 図5、6…筆者作成
- 表1…筆者作成